

第288回くらしの植物苑観察会 令和5年3月25日(土)

「古代の桜」

仁藤 敦史(当館 歴史研究系 教授)

はじめに

古代の竹木や草本の種類は、『万葉集』や『枕草子』『源氏物語』などの文献によれば、重複を除けば合計200種ほどが知られています。具体的な例を示すならば、花の種類について、『枕草子』は竹木61種、草本77種の計138種、『源氏物語』は竹木57種、草本54種、計111種との指摘がすでにあります。

なかでも春の花としてもっともポピュラーなのは、桜と梅とすることに異論は少ないと思われる。今回は、和歌に表現された桜についてお話したいと思います。

「百人一首」にみえる桜

まずは「百人一首」を見ると、春の花は七首あります。

- 9 花の色はうつりにけりないたづらに わが身よにふるながめせしまに 小野小町
この歌の「花」は、サクラかウメかとの議論があります。色が「うつる」(色あせる)前にサクラは散るのでウメ説が有力です。
- 33 ひさかたの光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ 紀友則
この花は、題詞に「さくらの花のちるをよめる」とあるように、明らかに散る花としての桜です。
- 35 人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香に匂ひける 紀貫之
こちらは「梅の花ををりて」と題詞にあるように、香りを重視する梅の歌です。
- 61 いにしへの奈良の都の八重桜 今日九重に匂ひぬるかな 伊勢大輔
八重(奈良)と九重(内裏・京都)の対比を詠んでいる点が技巧的です。
- 66 もろともにあはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし 大僧正行尊
桜の花見は古くは山桜を見ることが一般的であったようです。
- 73 高砂の尾上の桜咲きにけり とやまの霞たたずもあらむ
- 96 花さそふ嵐の庭の雪ならで ふり行くものは我が身なりけり

前中納言(大江)匡房と入道前太政大臣(藤原公経)の歌で、いずれも花は桜と考えられています。平安期に成立した『古今集』までの古い歌(6小野小町と33紀貫之)にウメが二首あり、花の表現が、ウメ(2首)からサクラ(5首)への転換がなされたことが知られます。

梅から桜へ

『万葉集』と『古今集』を比較すると春の花の代名詞の変化は明瞭です。まず『万葉集』巻八の「春雑歌」には春の花が多数詠まれています。その内訳は、梅7首と(山)桜6首が拮抗しています。梅は里の花、家の花という観賞用で日本では野生種のない外来種の花でした。しばしばウグイスとのセットで詠まれ、庭で守られる花、新年の祝い、中国趣味の要素が強いものでした。梅は人工的・文化的・都会的な花として位置づけられました。一方で桜は、邸宅内に植える「宿の桜」もありましたが山上の野趣を楽しむ山桜が基本でした。日本風で自然の山を表象する花でした。

これに対して『古今集』には巻一と巻二に「春の歌」があり、梅は18首、桜は40首が詠まれています。江戸時代の著名な国学者本居宣長の随筆『玉勝間』にはすでに「ただ花といひて桜のことにするは古今集のころまでは聞こえぬ事なり」と明言されているように、「花といえば桜」という観念は『古今集』からはじまりました。

『万葉集』では「梅の花咲きたる園の青柳はかずらにすべく成りにけらずや」817のように「柳と梅」のセット関係が詠まれたが、『古今集』では「みわたせば柳桜をこきまぜて宮こぞ春の錦なりける」5という「柳と桜」(みやこの情景)への転換がなされました。

平安京での桜は、『万葉集』の山桜から都会的な花として桜を都で楽しむ雰囲気醸成されました。文化の和風化と桜の重視は無関係ではないと思われます。

.....

次回予告 第289回くらしの植物苑観察会 令和5年4月22日(土)

「サクラソウの八重咲とそれに関わる遺伝子」

水田 大輝 (日本大学 生物資源科学部)

13:30~15:30 苑内東屋集合 申込不要 定員30名